

T・F・シスルトン・ダイアー 『シェイクスピアのフォークロア』
第11章「暦に関する風習」の翻訳(1)

堤 裕美子^{*}
古 宮 照 雄[†]

Abstract:

This is the translation of *Folk-Lore of Shakespeare*, especially on *Chapter XI. 'Customs connected with Calender'* written by Rev. T. F. Thiselton Dyer.

In this book many interesting customs of Shakespeare's time, which are mentioned in his dramas, are introduced. Dyer also shows us the origins and meanings of those customs in details. In this chapter, we can understand how people used to celebrate religious festivals and feasts connected with the calendar. In this translation, May Day is vividly observed in particular and we can see how eagerly people looked forward to and celebrated this pleasant day in Shakespeare's time.

キーワード:

シェイクスピア、エリザベス朝演劇、フォークロア、ドラマツルギー、T・F・シスルトン・ダイアー

往時にあっては、暦に示された祭日は、今日では想像もつかないほどの熱狂ぶりと陽気さで祝われた。例えば、シェイクスピアは、五月祭に関して述べているが、人々が五月一日を待ち望む熱意たるや大変なもので、この祭日が来ると、興奮の余り、おちおちと寝てもいられないというほどである。今日この頃では、祝祭に対する人々の熱意は次第に衰えてきて、ほぼ毎年、どこかの地方の習俗行事が姿を消している。一年間の様々な祭事に関係した古い迷信やら、民俗行事を、シェイクスピアは作品中のあちこちで、言及することを忘れていない。その行事の中には、今日我々の生活の中に、生き残っているものもある。仮面劇余興については、シェイクスピアは彼の劇作品のプロットを組み立てるに当たって、仮面劇余興の本に頼ったことは疑いが無い。『あらし』の仮面劇でアイアリス、シアリー

ズ及びジュノーが登場し、妖精たちが踊りをする。その後で、プロスペローはファーディナンドとミランダに、次のように言う。

君は、どうやら、驚いて、ひどく気をもんでいるようだが、どうか心配しないでくれたまえ。余興は終わったのだ。あの役者たちは、前にも言ったとおり、みな、精霊だったので、大気の中に、淡い大気の中に、とけてしまった。この幻影の、礎のない建物と同じように、雲を頂く高い塔も、豪華な宮殿も、荘厳な寺院も、この大きな地球そのものも、いや、この地上に在る一切のものも、結局は、とけ去って、いま消え失せた幻影のように、何一つ、跡形を残しはしない。
(『あらし』4幕1場146 - 156行)

^{*}佐野短期大学 総合キャリア教育学科(旧英米語学科) [†]千葉大学名誉教授

上の台詞から考えて、シェイクスピアは、1575年に開催されるケニルワース城の余興仮面劇に同席したのではないかと推測されている。その仮面劇は、エリザベス女王を迎えて盛大に執り行われたのであった。仮面劇の舞台では、湖や海に模したものが作られ、トリトンが人魚の姿になって、波の上を泳いで、エリザベス女王に挨拶した、とジョージ・ギャスコインは言っている。そして「詩人のアリオンが、イルカの背に乗って、女王に近づいてきた。」

『夏の夜の夢』のオペロンとバックの会話には、この出来事に直接言及したと思われる箇所がある。

オペロン おい、バック、こっちへ来てくれ。
お前は覚えているか。いつだったか、わたしたちが岬に腰をかけて、海豚の背にまたがった人魚が美しい惚れ惚れするような声で歌うときすがの荒海も魅せられて凧いってしまうのを見たが、どうだ、あの時のことを覚えているか。人魚の楽の音を聞こうと星までが天球からむやみと飛び出したものだったが。
バック 覚えてますよ。

(『夏の夜の夢』2幕1場148行 - 154行)

また、仮面劇を主として上演する「少年劇団」が当時存在したが、この劇団はブラック・フライアーズ座で公演した。『ハムレット』で、シェイクスピアは、この「少年劇団」のことを述べている¹⁾。旅役者の一座が、エルシノア城にやってくる前に、ローゼンクランツとハムレットとが交わす会話で、ハムレットは、演劇興行中止令が最近出されたので、俳優たちが困って、旅回りに出たのだろうとローゼンクランツに言う。この禁止命令は明らかにベストによるものだと推定される。すると、ローゼンクランツは次のように答える。

いや、一生懸命遅れないようにやっておりますがな。最近「ひなっ子達」とか申す子供の一座が現れまして、途方もない黄色い声を張りあげてやっております。それがまたとんでもないことに、ひどく人気を呼びましてね。これがただ今は大流行で、普通の芝居は——そんな名前までつけられてきてね——すっかり彼らへの攻撃のまにまにされております。そんなわけで伊達な殿方も作者の筆にかかるのを怖れて在来の小屋へ近寄らなくなりました。

(『ハムレット』2幕2場353行-60行)

Twelfth-Day

一十二日節、顕現日 (1月5日)

シェイクスピアの喜劇『十二夜』のタイトルは、「十二日節」に関する祝祭に起源があることは明白である。この時期は、大昔から、陽気に騒ぐ季節の一つであった。「十二日節」は、クリスマスの祝日に非常に近いので、そうはっきりとした陽気な風潮が現れたのである。この時期には、幸運を試す遊びが昔から多く行われ、突然陽気に騒ぐ風潮が、お祭り気分を高めたのであった。シェイクスピアの喜劇は、この祝祭に因んで名付けられたのであろう」とロイドは言っている²⁾。『十二夜』は、マニングラムが彼の『日記』(1868, ed. J. Bruce, p.18)で述べているように、1601-2年の2月2日に、ミドル・テンプル法院で、弁護士会の余興に演じられたのが初演であったのだろう。昔クリスマスのシーズンに、法学院で行われた余興が大変大袈裟なものであったことは、注目に値することである³⁾。「悪ふざけの王様」(余興の司会者)の楽しい脱線ぶりに加えて、様々な楽しみがあった。1594年、グレイ法院で行われたクリスマスの仮面劇は、まことに豪華であった。

St. Valentine's Day (2月14日)

—聖ヴァレンティンの祝日

聖ヴァレンティンの祝日の歴史的な起源が、異教から来たものにせよ、キリスト教にあるにせよ、この祝日が非常に古いものであることは疑いのない事実である。チャーサーも述べていることだが、古い伝承によれば、この日に、小鳥は自分の伴侶を選ぶという。だから『夏の夜の夢』でシーシェースは次のように言う。

やあ、お早う、諸君。セント・ヴァレンティンの祭日はとくにすぎているのだが、君たち森の小鳥どもは今ごろ交尾を始めようというのかね。

(『夏の夜の夢』4幕1場136行-37行)

聖ヴァレンティンの祝日には小鳥が交尾を始めるという迷信から、この日に、意中の恋人を選ぶというかつての民間風俗が生まれたのだと言われている。また、聖ヴァレンティンの祝日の朝に初めて出会った独身の男女は、互いに結ばれる公算が極めて強くと一般に信じられるようになった。この迷信は、『ハムレット』の中でオフィーリアの歌に示されている。

明日はヴァレンタインさまの日
夜のあけるのももどかしく
娘のあたしは、あなたの窓辺に
恋待つ人となりましょう。

(『ハムレット』4幕5場48-51行)

聖ヴァレンティンの祝日は、それにまつわる多くの慣習とともに、ローマ時代からイギリスに伝わった可能性が大変高いのであるが、キリスト教会の初期の時代に、ローマの祭日をキリスト教化するために聖ヴァレンティンが創始者ということになったのであろう⁴⁾。

フランスでは、ヴァレンティンの祝日は固定した日ではなかった。四旬節の第一日曜日に行われて「松明の日」(jour des brandons)と呼ばれていたが、それはこの日に、少年たちが火をつけた松明を持ち歩いたからである。

Shrove-Tuesday —懺悔火曜日

往時、懺悔火曜日は、あらゆる飲めや歌えやの騒ぎの日とされていた。しかし、この日にパンケーキを食べる習慣がいつから始まったのかは定かではない。この習慣は『終わりよければすべてよし』に言及されていて、道化が「懺悔火曜日はパンケーキ」(2幕2場25行)と言っている⁵⁾。『ペリクリーズ』では、'flap-jacks' (2幕1場87行)と言っているが、「パンケーキ」の意味である。「水の詩人」と言われたジョン・テラーが彼の『レント人形遊び』(1630, i. 115)で'flap-jacks'という語を使っている。「とうとう腕のいい料理人のおかげで、それはパンケーキ (flap-jacks) の形にできあがった。」「懺悔火曜日は、昔は多に陽気に騒ぐ時期となっていたので、'shrove' (懺悔する) が「陽気に騒ぐ」という意味になってしまったほどだった。『ヘンリー四世第二部』では、シャロー判事が次のように陽気に歌う。

いや、飲め、飲め！
女房天下はおいらが運命、
どうせ女子はじゃじゃ馬ぞろい。
気分出りゃこそお鬢が動く、
シュローブタイトじゃ、騒がにゃ損々。
そうれ、飲め、そうれ飲め！

(『ヘンリー四世第二部』5幕3場35-39行)

懺悔火曜日は、職人の徒弟、労働者その他については、自由放縱に振る舞うことのできる祭日であった⁶⁾。

Lent 一四旬祭・レント

往時、この季節には、今はすたれてしまった習俗が特徴となっていた。それは、わらやぼろ布で人形を作り、陽気に騒ぎながら町中その人形を引っぱり回した後で、人形を火で焼くか、弓で射るか、または煙突の中に投げ込んだりしたのであった。一説によれば、それは「レント人形」(Jack-a-Lent)と呼ばれた。この「レント人形」は、「イスカリオテのユダ」を象徴しているのであった。この「レント人形」という言葉は、『ウィンザーの陽気な女房たち』に二回出てくる。一度は、単なる愛称で、ページ夫人がロビンに「ねえ、キューピーさん (little Jack-a-Lent)、私のことをおしゃべりしなかったそうね？」(3幕3場 27-28行)と言う箇所であり、今一度は、悪口雑言として使ったもので、フォールスタッフは「知恵も使い方が悪けりゃ、でく人形 (Jack-a-Lent) の役にも立たねえってもんだ」(5幕5場 34-35行)と述べている。ベン・ジョンソンの『桶物語』にも、「レント人形」が出てくる。

おまえは、世の中へ出たといっても半人前、いわば、ぼろやくずやはしきれみたいなもの。この前、しくじってひまを出されて、聖灰水曜日にハムステッド・ヒースへ出かけたようだが、何のことはない。6週間もレント人形みたいに突っ立って、子どもがからかっておまえに小銭を投げるものだから、おまえはさしずめ財布という恰好だったじゃないか。

(『桶物語』4幕2場)

ニルダートンは、アシュモリアン博物館に稿本となって残っている『レント料理』と題するバラッドで、レントの物語を次のように締め括っている⁷⁾。

レント人形が陽気に姿を現わして、ニシンの頭をぶらさげてやってくる。そして、おっしゃることに、罪を悔い改めよ、と。汚い言葉など使ってはいけない、と。そして、しゅろの日の吉日へと進み、野菜の若芽やニシンをぶらさげていく。こうして、レントの季節は終わりとなる⁸⁾

エリザベス女王の治世では、レントの時期に、肉屋が新しい肉を売り出すことを厳重に禁止していた。それは宗教的目的からそうしたのではなく、この時期の肉の消費を抑えて、一年の他の時期にも肉の供給がまわるようにするためであり、また漁業を保護して漁夫の数を増やそうという目的もあって、一石二鳥を狙ったのである⁹⁾。だが、肉屋は宮廷に顔が利いたので、レント期間中の一週間に一定量の獣類を殺す許可を得てしまうことが多かった。その許可を得るために、動物の肉なしでは生きていけない病弱者の需要が口実とされた。『ヘンリー六世第二部』で、ジャック・ケイドが、アシュフォードの肉屋であるディックに向かって述べる台詞で、この慣習が言及されている。

おめえ (ディック) は羊や牛みてえに敵のやつらをなぎ倒した。まるで屠殺場にいるみてえな働きだった。手柄の褒美におめえに特許してやろう。四旬節には肉屋は一切けものを殺しちゃいけねえんだが、おめえだけは別だ。それも四旬節の長さをいままでの倍にして、おめえにだけは九十九年間この特許をやることにする。

(『ヘンリー六世第二部』4幕3場 4-9行)

『ヘンリー四世第二部』で、女将クイックリーがレント期間に肉を客に食わせたと知って、フォールスタッフがなじる場面がある。

フォールスタッフ だが、お前にもう一つ罪があるぜ。この家じゃ、宗法違反で、四句節最中に、肉を食わせたってことがあるらしいからな。こいつでお前も、いずれ地獄での大わめきは免れめえぜ。
 女将 あら、そんなこと、どこの飲み屋だっ
 てやってることじゃないの。長い四句節の間に猪肉の一片や二片くらい、なんだっというのよ。

(『ヘンリー四世第二部』2幕4場371-76行)

往昔、レントの期間中の給金は値切られていたのであるが、この慣習が、『ハムレット』の中で、ローゼンクランツによってほめかされている。

人間は面白くないと仰せられるようでは、役者などさぞ冷やかなおもてなし (lenten entertainment) を受けようと考えましたので。
 (『ハムレット』2幕2場28-30行)

上記の台詞と比較してみたらよいと思われるのは、『十二夜』のマライアの「そっけない返事 (lenten answer, 1幕5場9行) である。

『ロミオとジュリエット』で、マキューシオが断片的な諺めいた歌を歌うが、その歌と、その前置きとなっている言葉から、レントでは古くなった兎肉を使って、パイを作ったらしいと考えられる。

出るには出たが、これは兎じゃないか。ほらあの四句節のパイの中に入っている兎の肉、食べる前から古くてかび臭くなっているやつ、あんなのを兎というのならまた話は別だがね。

年とってかび臭い唯の兎、
 年とってかび臭い唯の兎、
 四句節の食物とはいうものの、
 かび臭くなってしまった唯の兎、
 食べる前からかび臭い、

それでは銭は払えない。

(『ロミオとジュリエット』2幕4場138-46行)

Scambling days

— (食物の) 奪い合いの日

レント期間中の月曜日と土曜日は、「奪い合いの日」と名付けられている。この日には、わずかな食事しか出されないの、家族が多いと、食物の奪い合いになるからである。『ヘンリー五世』でヘンリー王がフランス王女キャサリンに向かって述べる次の台詞は、この慣習の婉曲な言及なのかもしれない。

もしあなたがわたしの妻になってくれるなら——ケート、わたしは心の中できっとあなたがそうしてくれると確信をもっているのだが——わたしはあなたを戦争で勝ち得た (get with scambling, 即ち「奪い取った」の意) ことになるわけだ。

(『ヘンリー五世』5幕2場216-18行)

第五代ノーサンバランド伯爵の古い家計簿には、この「奪い合いの日」に食事を出す時の順序を指導し、それによって醜い争いが起こらないようにと指示が書きつけてある特定の書き込み欄がある。また、同じ『ヘンリー五世』で、カンタベリー大監督が「騒然とした不審な時勢」(scambling and unquiet time, 1幕1場4行) と言っているのも比較してみるとよいであろう。

God Friday — 聖金曜日、受苦日

シェイクスピアは、聖金曜日を、ただそれだけとして言及しているほかには、昔この日に関連して行われた行事については全く言及していない。『ジョン王』では、庶子フィリップがフォークンブリッジ夫人に対して次のように言っているが、これはフィリップの実の

父親がサー・ロバート・フォークンブリッジではなかったことを間接的に表現している。

母よ、ぼくは老サー・ロバートの息子ではなかったんです。
 受苦日に、ぼくの体の中にあるあの男の分を食ったって、
 サー・ロバートは断食をやめたことはなかったでしょうよ。

(『ヘンリー四世第二部』1幕2場126-29行)

また、『ヘンリー四世第一部』では、ポインズが次のように述べている。

おい、ジャック、手前、こないだの金曜日
 はな、キリスト様の御受難日だっていうのに、マデイラ酒一杯と鶏肉一片とて魂まで悪魔に売っちめえやがった。おい、あの取引きはどうなったんだよ。

(『ヘンリー四世第一部』1幕2場126-29行)

Easter 一復活祭

俗説によれば、復活祭の日に新しい着物に着換えないと不幸になると考えられているが、『ロミオとジュリエット』で、マキューシオがベンヴェーリオに「復活祭の前なのに新調の胸衣を着ているとって仕立屋に食ってかかったのも君だったし、せっかくの新調の靴に古い紐をつけているとってだれかとりやりあったのも君だったな、そうだろう？」(3幕1場29-32行)と言っているのは、その慣習を指しているのである。イースト・ヨークシャーでは、復活祭の前夜に、若者たちは最も近い町へ出かけて、新しい衣装とか身のまわりの装飾品などを買い求めて、それを復活祭の日に初めて身につける。さもないと、ミヤマガラスとか「クイナ」が、彼らの着ている衣類を汚すと固く信じられているのである¹⁰。「貧しいロビンの暦」には、次のよう

な歌が載っている。

復活祭になったら、新しい衣装を身につける。
 さもないと、きっと後悔することになるだろう。

復活祭に、乞食が「食器の音をたてて施物を乞う」習慣は、今でもイギリスのいくつかの州では完全にすたれることなく残っているのだが、『尺には尺を』でルーシオが言っている次の台詞は、たまたまこの慣習に言及しているものだという説もある。

ほらあの五十歳の女乞食、あいつの木の椀は一ダカットの金を入れてやるのが侯爵のくせだったんですがね、えらい物好きもあつたもんでさあ¹¹。

(『尺には尺を』3幕2場133-35行)

上記の台詞に出てくる「木の椀」(clackまたはclap-dish)とは、外せる蓋のついた木の深皿で、昔乞食がこれを持ち歩き、施物をもらっていないので空の皿なのだということを示したい時は、蓋で皿を叩いて音をたてたのであった。このようにして、乞食は施物を手に入れていた。癩病者や伝染性の疾病のある乞食が最初にそれを使い始めたのであるが、それは、施しをしてくれる人あまり近づかないようにして、人々が病者に触れることなく施物が与えられるよう、警告の意味で音をたてたのであった。

復活祭の翌日の月曜日(Easter Monday)は、民間では「暗い月曜日」(Black Monday)と呼ばれているが、その理由をジョン・ストウは次のように解説している。「エドワード三世の治世の34年目(1360年)の4月14日のこと、その日は復活祭であったが、エドワード王は彼の軍勢を引き連れてパリの市街を包囲していた。その日は霧や霽のため

に暗く曇っていて、厳しい寒さだった。多くの兵士が寒気のために、馬上にまたがったまま死んだ。それ故この日が、以来、暗い月曜日と呼ばれている。』『ヴェニスの商人』では、ランスロットが「去年の復活祭あけの暗い月曜日は、朝の6時に私が鼻血を出しました時には訳がありましたわけで」(2幕5場24-26行)と言っている。

St. David's Day

—聖ディヴィッドの祝日(3月1日)

聖ディヴィッドの祝日は、ウェイルズの守護聖人である聖ディヴィッドを記念して、ウェイルズ人が祝うものであるが、ウェイルズ人はその日に、かれらの愛国心の印としてニラを身につける。この慣習の起源については分からないことが多い。ウェイルズ人に言わせれば、聖ディヴィッドが、ブリトン人(ウェイルズ人)の帽子にニラをつけて、戦いの時に敵であるサクソン人と見分けがつくようにせよと命じた、という。『ヘンリー五世』でフルーエリンが、ヘンリー五世に次のように語りかける箇所は、この慣習に言及しているものである。

フルーエリン おそれながら陛下、われらの記憶に著名な御祖父の君、および大伯父の君エドワード黒太子は、歴代記で読みましたが、当フランスにおいて豪胆無比の武勇つぶりを発揮されましたじゃ。

ヘンリー そのとおりである、フルーエリン。
フルーエリン 陛下のおっしゃったことは、まことにごもっともでありますじゃ。陛下も御記憶とは存じますが、ウェイルズ人は蕪をつけたマンマス帽をかぶって、蕪はそのときの勲功のしるしとなったのでありますじゃ。聖ディヴィッドの日には陛下も、ちゅう

ちよされることなく蕪をお付けになれることと確信しておりますじゃ。

(『ヘンリー五世』4幕7場95-108行)

上記の台詞で、フルーエリンは、エドワード黒太子のもとで戦ったウェイルズ人がニラをつけていたと言っているが、一部の批評家が考えているように、このことからこの慣習がクレシーの戦いに起源があるのだという確固とした証拠になるわけではない。単に、シェイクスピアがこの作品を書いた頃に、ウェイルズ人がニラをつけていたことを示しているだけだ、という解説があるが、その解説が正しいのである。同じ『ヘンリー五世』で、フルーエリンがピストルに次のように言っている。

わしゃ心から懇願するんじゃ。きたならしいしらみばかり奴。さあこの蕪をたべてくれ。わしの希望で、要求で、嘆願なんじゃ。なぜならばじゃ、いいかね、お前はそれを好かんのじゃから。お前の気持も食欲もどうもそれに合わんのじゃから、わしはお前にそれをたべてもらいたいんじゃ。

(『ヘンリー五世』5幕1場23-28行)

上記の台詞は、ピストルが軽蔑したニラを、フルーエリンがピストルに食べさせようとする印象的な場面であるが、この台詞から考えても、単に慣習としてウェイルズ人がニラを身につけていたことが分かる¹²⁾。ピストルは、それより前に、次のように言っている。

彼奴(フルーエリン)に伝えて欲しい。聖ディヴィッドの祭りの日には、彼奴のかぶっている帽子の蕪ごと、たたきめしてくるからと。

(『ヘンリー五世』4幕1場54-55行)

往昔、聖ディヴィッドの祝日は、王侯がこ

れを守ったのであった。1695年、ウィリアム三世は、聖ディヴィッドの祝日に、ニラを身につけたという記録がある。「守衛官のポーターがそのニラを国王に差し出した。その日国王がお召しになったすべのものは、剣にいたるまで、守衛官ポーターの役得となるのである。」昔聖ディヴィッドの祝日には、様々な慣習にまじって、ウェイルズ人をかたどった人形を焼くという習慣があったらしいが、それへの言及が1757年の『貧しいロビンの暦』に見られる。

知らない人が見たら笑うだろうに。
 イングランド人が哀れなタフを絞り首にする。
 スポンも上衣も、靴も靴下も、その他一切、
 きちんと身につけているが、そのなかみは
 乾草だけ。
 これがイングランド人の馬鹿にするウェイルズ人だ。

St. Patrick Day

—聖パトリックの祝日（3月17日）

『ハムレット』では、デンマークの王子が聖パトリックにかけて誓う場面（1幕5場136行）があるが、その点について、ウォーバートンは「北欧世界は、すべてアイルランドから学問を受け取ったからだ」と言っている¹³⁾。しかし、シンガーの主張によれば¹⁴⁾、シェイクスピアは最初に思いついた誓言形式を利用しただけで、聖パトリックの名が、デンマークや、またその誓言を使っているハムレットにふさわしいかどうかなどは、考えもしなかったのだという。また、一説によれば、聖パトリックの煉獄に言及していると考えられる向きもあるが、適切とは思われない。

St. George's Day

—聖ジョージの日（4月23日）

イングランドの守護聖人、聖ジョージについては、シェイクスピアは何度も言及している。聖ジョージの祭日は、昔は都市や団体が宴会を催して祝ったものだが、今日では、目をとめる人もなく、見過ごされている。『ヘンリー六世第一部』で、ベッドフォード公爵は、「我らの聖ジョージの祭を盛大に祝わねばならない」（1幕1場154行）と言っている。「主なる神」と「聖ジョージ」は、かつて戦争で普通に用いられていた関の声であり、シェイクスピア劇では何度も出てくる。例えば『ヘンリー五世』で、国王ヘンリーは、兵士たちに向けてこう叫ぶ¹⁵⁾。

「神よ、ヘンリーを、英国を！聖ジョージ！」
 と叫べ！

（『ヘンリー五世』3幕1場34行）

また、『ヘンリー六世第一部』では、トールボットが、次のように言う。

神よ、聖ジョージよ、トールボットとイングランドのために。

この決戦において我らの旗を守りたまえ。

（『ヘンリー六世第一部』4幕2場55-56行）

古い戦闘規定では、敵を攻撃する際、聖ジョージの名を使うことに関する指示が述べられているが、この指示は珍しい。「戦闘、攻撃、共通の関の声として、聖ジョージ、進め、またはやっつけろ、という掛け声をする。その掛け声によって、兵士の勇気は倍増し、敵は恐れをなす。聖ジョージの名を叫んで、何度も勝利に輝いたイングランドの祖先の勇気を思い出すからだ¹⁶⁾。」

聖ジョージが馬上姿で龍と戦う様子は、看板絵の主題として、古くから使われてきたも

のである。『ジョン王』で庶子フィリップは次のように言っている。

龍をなぐって以来、酒場の入口の看板で、馬に乗っているジョージ聖人よ。

(『ジョン王』2幕1場288-89行)

この看板は、今でも大変有名な看板である。ロンドンだけでも¹⁷⁾、ビアホールやコーヒーハウスを数に入れなくても、「聖ジョージとドラゴン」という看板をかけた酒場や居酒屋は、66軒は下らない、と言われている。

May Day 一五月祭

五月祭の祝日は、太古の昔から、イギリスでは非常に人気があったが、それは春という楽しい季節の連想によるのであろう。五月祭は、今日よりも昔のほうが熱心に祝われたのであった。ボーンが語っているように、若者たちは、真夜中少し過ぎに起きて、近くの森へ歩いて行き、途中で賑やかに音楽を奏したり笛を吹いたりし、森では木の枝を折って、それに花飾りや花輪をつけ、太陽が昇るとまもなく帰ってきて、家の入口や窓にその枝を置くのを習慣としていた。シェイクスピアはこの習慣に言及して、五月祭を待ち望む気持ちが強かったために、五月祭の夜明けにはとても寝てられない状態であったことを我々に知らせてくれる。『ヘンリー八世』では、次のように述べられている。

まあ、親方、落ち着いて。これじゃどうしようもありませんや。

大砲でもぶっ放して追い出さないことには、帰りませんぜ。五月祭の朝に眠ってろってというようなもんで、無理な話でさ。

(『ヘンリー八世』5幕4場12-15行)

また、『夏の夜の夢』では、ライサンダー

がハーミアに言う台詞に、五月祭のことが出てくる。

もし君がぼくを愛していてくれるなら、明日お父さんの家からこっそり抜け出して、町から一リーグのところにあるあの森のところまで来てくれないか。いつだか君がヘレナと五月の朝の祭の行事をしているところにぼくが行きあたったあの森だ。ぼくはあそこで君の来るのを待っている。

(『夏の夜の夢』1幕1場163-68行)

そして、シーシェースは次のように言っている。

五月祭の儀式を行おうというので今朝早く起きたものだろう、きっと¹⁸⁾。

『二人の血縁の貴公子』の中で、四人の田舎の男たちの一人が「あわれみんなで五月祭の祝いをしようじゃないか」(2幕3場37行)と、たずねている。

チョーサーの『愛の宮廷』では、五月祭の朝早く「身分の高さも低きも、宮廷のすべての人がそろって森へ出かけ、露にぬれた咲いたばかりの花をつんでくる。」ヘンリー八世の治世の記録によると、ロンドン市当局の幹部たちが、ケント州の丘へ出かけて五月祭の集会をしたところ、シューターの丘で、国王のヘンリー八世と王妃アラゴンのキャサリンに出会ったが、国王たちも、グリニッジ宮殿から出てきたのであった。比較的最近まで、五月祭の習慣は、イギリスの一部の州に残っていた。ニューキャスル・アポン・タインでは、次のような戯唄が歌われていた。

さあ、起きてくれ、かわいい娘さんよ、おれは家から4マイルも歩いてきたのだ、お前のために、五月祭の花輪をこしらえたのだ、

さあ、起きて、五月祭を祝ってくれ。

五月祭の朝には、子どもたちが花輪を持って家から家へまわって歩く習慣がある。今日田舎で村の子どもたちが歌うバラッドの多くは、五月祭そのものはすたれてしまったが、古い五月祭の慣習を歌ったものであることは明白である。

昔は、ほとんどすべての村が五月柱を立てて、それを花輪やリボンや旗で飾り、そのまわりで村人が、朝から晩まで陽気に踊った。イギリスの五月柱の最も古い描写は、『ヴェオリオラム・シェイクスピア』の中にあるもので、それによると、スタッフォードシャーのベトレーの邸の窓に設けられたという。この邸はトレット氏が所有しているが、トレット氏は、それがヘンリー八世の時代に遡るほど古い邸だと考えているようである。五月柱の柱は盛り上げた土の中に植え込まれていて、聖ジョージの赤い十字の旗と、二またに先端が割れている吹き流しがついている。柱身は黄色の地の上に、黒の斜線がついている。この五月柱の装飾は、あらゆる古い五月柱の特徴であって、シェイクスピアも『夏の夜の夢』で「けばけばしく塗りたてた五月柱」(3幕2場296行)といっている。この言葉は、ヘレナがハーミアの恋人ライサンダーを奪ったと誤解したハーミアが、長身のヘレナを五月柱に例えたものである¹⁹⁾。昔、五月柱の人気が高かった時は、ロンドンの教区の一つである「聖アンドルー・アンダーシャフト」(アンダーシャフトは斜めに下っている樺)という名が、教会の尖塔から下っている五月柱に由来しているという事実からも察知できる。このことは、チャーサーも述べていて、「やたら威張る男」について、次のように述べている。

だれにも負けずに、威張って頭をそっくり返しているのは、

コーンヒルの大きな柱を支えているといわんばかりだ。

ロンドンにはいくつも五月柱が立っていたが、その一つが聖ポール大聖堂の近くのベISING・レーンにあった。それは大きなモミの木で、高さ40フィート、直径が15インチあり、巨人ジェラードの槍試合用の槍に使われていたという伝説があった。しかし、現在イギリスのあちこちに散らばって残っている五月柱はわずかである。一つは、マンチェスターのペンドルトンにある教会の風見鶏の支柱になっている。数年前、パービーシャーの村の牧草地に、数本の五月柱が立っていたことが確認されている。五月柱の周りで踊る時に歌う歌は、地方によって異なっているが、滑稽と神聖の入り混じった奇妙な言葉であることが多い。

五月祭のもう一つの呼び物は、モリス・ダンスである。その踊りに登場する主要人物は、ロビン・フッド、メイド・マリアン、スカレット、ストークスリー、リトル・ジョン、ホビー・ホース、道化のパヴィアン、笛と太鼓を持った笛吹きトムである。登場人物の数は、時と場所によって、いろいろと変化した。『終わりよければすべてよし』で、道化が次のように言っている。

びたりと合いますよ。弁護士に十グレート、めかした浮売にフランス金貨、田吾作の人さし指に蘭草の指輪、懺悔火曜日パンケーキ、五月祭にモリス・ダンス、釘穴に釘、寝取られ亭主に角、どなり男にがみがみ女、坊主の口に尼の唇、いや、ソーセージの皮にその中身といったぐあいびたりとね²⁰⁾。

(『終わりよければすべてよし』2幕2場22-29行)

『ヘンリー六世第二部』で、ヨーク公爵は、ケイドについて次のように述べている。

陽気に踊るは、はねるは、
踊り子の鈴のように、血のついた投げ槍が
鳴りひびく始末。

(『ヘンリー六世第二部』3幕1場364-66行)

『二人の血縁の貴公子』では、学校教師の
ジェロルド(またはジェラルド)がシーシュー
スに向かって、モリス・ダンスの説明を、次
のようにしている。

もしもお気に召していただけますれば、余
興をお目にかけたいと存じます。ここに集
まりました者どもは、あからさまに言って
ほとんどが「村の田舎者」でございます。
うそもかくしもいたしません、我々は陽
気な連中、ワイワイ連でございます、言
葉のあやをつけますれば、劇のコーラス役
みたいなもの。恐れ多くもお上の前で、モ
リス・ダンスをお目にかける所存などござ
います。私めが監督になりまして、いわゆ
る「先生役」で、小さな生徒のお尻に鞭、
大きい生徒には杖でピシピシとやる流儀
で、ここにこの余興をば仕上げてご覧に供
する次第でございます。さてシューシュー
ス様の並々ない勇名は、地獄の果てや世の
すみずみまで、行きわたっておるのでござ
いますが、どうかこの哀れな余興にお目を
かけて下さいまして、一寸こちらの大き「モ
リ」という看板をごらん下さい。そこへ「ス」
という看板がやってきて、両者併せて「モ
リス」となる次第。その「モリス」踊りの
ために、我々は集まったのでございます。
この余興はよくよく考えました結果で、私
がまず浅学非才も省みずしゃしゃり出て、
御領主様の前でご挨拶する次第。足もとに
私めの筆箱をば献上いたします。さて後に
続くは、五月祭の王と王妃、女官と廷臣は
夜になると垂幕のかけにかくれ何やらこそ
こそ。宿屋の亭主とおかみは、疲れた旅人
を大歓迎でひっぱりこみ、ボーイに言い合

めて後で勘定書を水ましする笑段。それか
ら、ミルクがぶ飲み田舎者、そして道化
も登場いたします。長い一物をくっつけた
バビオンとか、その他もろもろが踊りをご
披露いたします。それでは早速、はじまり、
はじまり。

(『二人の血縁の貴公子』3幕5場100-132行)

シェイクスピアは、あちこちでモリス・ダ
ンスに言及しているが、その中に『ヘンリー
四世第一部』の次の台詞も入るであろう。

なんだ、女だったのかよ？

まあ、手前が女なら、メリアン女郎(Maid
Marian) だって、区長代理どんの奥方く
れえは動まらァな。

(『ヘンリー四世第一部』3幕3場129-30行)

上記の台詞は、「後になってモリス・ダン
スのメイド・メリアンが、いかがわしい性格
を帯びるようになり、女よりも男めいた動作
をしていた」ことへの言及である²¹⁾。

五月祭のモリス・ダンスのもう一人の登場
人物である「ホビー・ホース」は、時折省か
れた。そのために、ハムレットも口にしてい
る有名な次のバラッドの一行が生まれたと考
えられる。

ああ、竹馬(hobby-horse)は忘れられた。

(『ハムレット』3幕2場144-45行)

上記のバラッドの一節は、『恋の骨折し損』
でも引用されている(3幕1場30行)。ホビー・
ホースは、ボール紙で馬の頭を作り、柳の枝
で作った軽い枠組みを馬の身体に見立てて、
人間の下半身につけるのである。ひもでしっ
かりと結びつけ、地面まで引きずるような飾
り馬衣でおおい、踊り手の足を隠す。踊り手
は、馬に乗ったつもりで、道化に曲芸をして
みせ、見物人の歓声に合わせて、様々な道化

じみた所作をした。サー・ウォルター・スコットの『修道院』には、ホビー・ホースの生き生きとした描写がある。

「ホビー・ホース」という言葉は、「ふしだらな女」という意味にも用いられたが、このことは、『冬物語』のレオンティーズの台詞にも出てくる。レオンティーズはキャミロに、次のように言っている。

もしもお前が正直に言うつもりなら言え、さもなければ生意気に眼も耳も思考力ももちませぬと言ひ張るがいいが、さ、言え、おれの妻は尻軽女 (hobby-horse) だと、婚約もせぬうちにくつついてしまう紡ぎ女同様の醜名を受けてしかるべきだと。そう言って、その証拠をあげてみせろ。

(『冬物語』1幕2場273-78行)

『オセロー』ではピアンカが、デズデモーナのハンカチを手にして、キャシオーに次のように言う。

今くれたあのハンカチは、ありゃ、いったいなあに？受け取ったあたしもいいお馬鹿さんだったわ。模様を写せだって？——部屋に落ちてたけど誰が落としたんだか分からないなんて、そうでございましょうよだ！どこかのおひきずりにもらったんだろう。それをあたしに写せだって？ほら、好きな娘 (hobby-horse) にやるといいや、どこから持って来たんだか知らないけど、あたしゃ写すのはご免だよ。

(『オセロー』4幕1場154-61行)

「ホビー・ホース」は、「愚かな人」という意味にもなったらしく、『空騒ぎ』ではベネディックがその意味で使っている。

お耳に入りたいような格言を七つ八つ思いついたのだが、

あの竹馬どもには聞かせたくないの。

(『空騒ぎ』3幕2場73-75行)

今一人の五月祭の登場人物は、ロビン・フッドの司祭のフライアー・タックで、『ヴェローナの二紳士』の中で、山賊の一人がタックの名を口にする。

ロビン・フッドの太ったタック坊主の刺った頭にかけて、この男は、われら山賊の王にしても恥ずかしくない人物だ。

(『ヴェローナの二紳士』4幕1場36-37行)

トレットの描写によれば、フライアー・タックは、聖職者らしく頭を刺ったフランシスコ派の修道士である。トレットは、次のように付け加えている。「教区の司祭が、五月祭に手を出すことを司教によって禁止された時、フランシスコ派の修道士だけは、同教派の管轄から外れていたのだから、参加してもよいことになった²²⁾。」

五月柱の立っている草原で、モリス・ダンスが終わると、無法者ロビン・フッドの冒険に基づいて滑稽な韻文幕合劇が上演されるのも珍しいことではなかった。ドレイクの考えによれば、『十二夜』にこのような幕合劇への言及が見られるという。即ち、サー・アンドリュー・エイギューチークが決闘状を手にして登場すると、フェイビアンが次のように叫ぶ場面である。

お祭り (May morning) 向きの余興がもう一丁できあがったようだ。

(『十二夜』3幕4場156行)

原 注

- 1) E. Goadby, *England of Shakespeare*, 1881, p.153.
- 2) *Critical Essays on the Plays of Shakespeare*, 1875, p.145. *Shakespeare*, iii. pp.347, 348 参照。
- 3) *British Popular Customs*, p.473 参照。
- 4) *Notes and Queries*, 6th Series, i. p.129.
- 5) 『お気に召すまま』で、タッチストーンの「さる勳爵士は誓われました。これはわが名誉にかけて、よろしくパンケーキである、と」(1幕2場66-7行)
- 6) Home, *Every Day Book*, 1836, i. p.258 並びに *Book of Days*, i. p.239 参照。また、Dekker, *Seven Deadly Sins*, 1606, p.35 並びに *British Popular Customs*, pp.62-91 参照。
- 7) *Notes and Queries*, 1st Series, xii. p.297.
- 8) Nare, *Glossary*, i. p.443 並びに Brand, *Popular Antiquities*, 1849, i. p.101 参照。「水の詩人」と言われたジョン・テラー には『レント人形、その起源と余興、懺悔火曜日の案内式部宮の悪戯』と題するパンフレットがある。
- 9) Singer, *Shakespeare*, vi. p.219
- 10) *Notes and Queries*, 4th Series, v. p.595.
- 11) Singer, *Shakespeare*, i. p.362; Nares, *Glossary*, i. p.164; Brand, *Popular Antiquities*, 1859, iii. p.94 参照。
- 12) Hone, *Every Day Book*, i. p.318; *British Popular Customs*, pp.110-13 参照。
- 13) 聖パトリックは、アイルランドから蛇を追いかつた、とされている。
- 14) Singer, *Shakespeare*, 1870, ix. p.168.
- 15) 『ヘンリー五世』5幕2場、『ヘンリー六世第三部』2幕1場2場、『じゃじゃ馬馴らし』2幕1場、『リチャード二世』1幕3場参照。
- 16) Warton の『リチャード三世』5幕3場への注記に引用されている。
- 17) Hotton, *History of Sign Boards*, 1866, 3rd Edition, p.287.
- 18) 『十二夜』の「お祭り (May morning) 向きの余興がもう一丁あがったようだ」(3幕4場156行) 参照。
- 19) *Book of Days*, i. p.575. *British Popular Customs*, pp.228-230, 249 参照。
- 20) Brand, *Popular Antiquities*, i. pp.247-270; *Book of Days*, i. pp.630-633 参照。
- 21) Nares, *Glossary*, ii. p.550.
- 22) Drake, *Shakespeare and his Times*, 1817, i. p.163 参照。

参考文献

- シェイクスピア—筑摩書房『シェイクスピア全集』(1974年)
- 「ヘンリー六世第一部」小津次郎・喜志哲雄訳
「ヘンリー六世第二部」小津次郎・大場建治訳
「ジョン王」北川悌二訳
「ヘンリー四世第一部」中野好夫訳
「ヘンリー四世第二部」中野好夫訳
「ヘンリー五世」大山俊一訳
「ヘンリー八世」中野里皓史訳
「ヴェローナの二紳士」北川悌二訳
「夏の夜の夢」平井正穂訳
「ヴェニスの人」管泰男訳
「ヴェローナの二紳士」北川悌二訳
「空騒ぎ」小野協一訳
「お気に召すまま」阿部知二訳
「十二夜」小津次郎訳
「ウィンザーの陽気な女房たち」三部勳・西川正身訳
「終わりよければすべてよし」工藤昭雄訳
「尺には尺を」平井正穂訳
「ペリクリーズ」御輿員三訳
「冬物語」福原麟太郎・岡本靖正訳
「あらし」和田勇一訳

- 「ハムレット」三部勲訳
「オセロー」木下順二訳
○シェイクスピア—新樹社『シェイクスピア全集』(1980年)
「ヘンリー四世第一部」坪内逍遙訳
○シェイクスピア—新潮社『シェイクスピア全集』6(1967年)
「ヘンリー四世第二部」福田恒在訳
○シェイクスピア—『集英社ギャラリー・世界の文学』2 イギリス I (1991年)
「ロミオとジュリエット」平井正穂訳

文の分担に従って担当した。

- (1) 古宮照雄：冒頭より「復活祭」まで
(2) 堤裕美子：「聖ディヴィッドの祝日」より「五月祭」まで

付 記

1. 翻訳に用いた原書は、Rev. T. F. Thiselton Dyer, *Folk-Lore of Shakespeare, Chapter XI, 'Customs connected with Calender'*, Dover Publication, 1966 (originally published by Griffith and Farren, circa 1883) である。今回は11章のうち約半分を翻訳した。
2. シェイクスピアやその他の作家からの引用文は、参考文献にあげた諸家の翻訳を使用した。が、多少改めたところがある。
3. 翻訳のないもの、もしくは入手できないものは、訳者による訳文である。
4. 原注はページごとの脚注になっているが、まとめて最後にまわし、通し番号を付した。
5. 原書では、シェイクスピアからの引用箇所を明示していないが、A. L. Rowse (ed.), *The Annotated Shakespeare*, 3 vols, Clarkson N. Potter, 1978 によって、幕・場・行を示した。
6. 本稿の全内容に関する責任は共訳者に等しくあるが、翻訳にあたっては、まず以下のように分担し、各翻訳終了後、全体について訳者同士で推敲を重ね、完成に至らせた。なお、「原注」の翻訳は、本